

福岡市およびその周辺部における 1976～2001 年の 25 年間の乳歯ウ蝕有病状況の推移

○平田夕紀*、竹本慈*、藤好未陶**、松岡奈保子*、中村清徳*、西本美恵子*、柏木伸一郎*、藤田孝一*、中村譲治*
NPO 法人ウエルビーイング*、福岡歯科大学口腔保健学講座**

【目的】都市部における乳歯ウ蝕有病状況の推移を明らかにすること。

【対象】1975 年以来同一基準で年 1 回歯面別の歯科検診を行ってきた、NPO 法人ウエルビーイングが管理している福岡市及びその近郊の保育園、幼稚園の 3, 4, 5 歳児。

【方法】解析は 1976 年 (623 名), 81 年 (773 名), 86 年 (783 名), 91 年 (744 名), 2001 年 (1005 名) の各年度検診受診者計 3928 名の乳歯ウ蝕状況のデータについて行った。

【結果】1976～2001 年の 25 年間の乳歯ウ蝕有病状況の経年変化をみると、5 歳児の乳歯ウ蝕所有者率は 95% から 70% へ、deft index は 9.7 本から 4.7 本へと減少した。内訳を見ると、未処置歯が減少し処置歯が増加していた。また 1990 年代に入ってシーラント処置歯の増加がみられた。

2001 年データについて年齢変化を見ると、ウ蝕所有者率は 3 歳が 40%、4 歳が 63%、5 歳が 70% と 3、4 歳間に大きな増加がみられている。deft index も 3 歳が 1.8 本、4 歳が 3.4 本、5 歳が 4.7 本と同様に増加していた。

歯面別評価では、全体的にウ蝕の減少が認められるものの、2001 年の段階でも上顎 A の近心面、上下顎 DE の咬合面、下顎 D の遠心面のウ蝕罹患傾向が依然として高いことがわかった。

【考察】以上の結果から、早い時期からの AA 間、DE 間へのフロス使用、DE への積極的なシーラント処置といったピンポイントのウ蝕予防と、平滑面ウ蝕予防に効果の高いフッ化物応用が今後のさらなるウ蝕減少に有効であろうと考えた。

夜間・休日救急外来を持つ診療所における小児初診患者の実態調査

平野洋子

医療法人秀和会小倉南歯科医院 小児歯科

【目的】当院は、複数の診療部門を併設して、様々な患者に対応しており、夜間・休日でも当直医が急患対応を行っている。小児急患はその一割強で、その後、演者が担当する小児歯科外来で治療継続する例も多いため、その実態を把握し診療の一助とすべく調査を行った。

【方法】対象は過去 3 年間(2001.4.1-2004.3.31)の 16 歳未満の当院初診者で、1.6 歳-3 歳時検診受診者を除いた 688 名。これを、当院診療時間内(月～土 9:00-21:00)の初診者 422 名(日中群)と、時間外の初診者 266 名(夜間休日群)の 2 群に分け、男女比、年齢分布、主訴を調査した。また、初診時診査記録が得られた児については、齲蝕罹患状況を調査した。

【結果】男女比：両群とも男児の方が多く(日中群 51.9%、夜間休日群 57.9%)。夜間休日群の方がその傾向が強かった。

受診時年齢：日中群の年齢範囲は 8m-15y7m (平均 6.4 歳)、夜間休日群は 8m-15y2m (平均 6.3 歳)。5-6 歳をピークに、同じような分布を示したが、日中群では 2-3 歳の受診が多く、夜間休日群では、12 歳以上の受診が少ない傾向があった。

来院時主訴：両群とも齲蝕が 60% 以上で最も多いが、外傷の割合は夜間休日群(19.2%)の方が日中群(9.2%)より多かった。

齲蝕罹患状況：初診時記録のある日中群 388 人、夜間休日群 71 人について、母数の多かった 3-6 歳について dfi 指数を、6-8 歳について DMFT 指数を比較した。3-6 歳全体の dfi 指数は夜間休日群(9.33)が日中群(8.55)より大きい。年齢毎の比較では日中群の方が大きい年齢もあった。DMFT 指数は全体でも年齢毎でも日中群が大きい傾向があった。